



2009年6月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2009年6月
第74号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

もつぐ梅雨



目 次

漢点字の散歩（13）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（70）（山内 薫）	6
一言（岡田健嗣）	8
毎日新聞記事から：「漢点字」を学ぶ人が増えています	11
ルイ・ブライユの偉業を生かすために（木村多恵子）	13
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	14
東京漢点字学習会報告（菅野良之）	20
見果てぬ夢を（16）（山本優子）	24
漢点字講習用テキスト（初級編・第15回）	26
ご報告とご案内	29
編集後記（木下和久）	31

漢点字の散歩 (十三)

岡田 健嗣

五 点 字



本稿では、〈点字〉をご存じない皆様も、点字をパターンとしてお受け止めただければ充分です。点字で何が書かれているかを読み取る必要はありません。

② ドイツ語点字(一)

序

前回まで三回に渡って、英語点字について考えて来た。私はそこで、「拡張アルファベット」という用語を用いてみたが、仮にこのような捉え方が必要ではと考えたからに他ならない。仮というのも、英語点字の解説書には、そのような語彙は、全く登場しない。一つの法則性に基づいた整理がなされているというだけで、取り立てて、アルファベットの文字はこう使用する、それ以外の点字符号はこう使用するという整理ではなかった。点字符号を大づかみに捉えて、その中にアルファベットもその他の点字符号も一緒に整理され

ているのであって、そういう整理に以前から気づいていただけである。

今回はドイツ語の点字をご紹介するのだが、この「拡張アルファベット」という概念は、ドイツ語点字では極めて強く打ち出されているように見える。ただし英語点字と同様に、このような用語や概念を、取り立てて押し出している訳ではない。むしろ「当然そうなる」という取り扱いである。従ってここで言う「拡張アルファベット」は、あくまで本稿に限って使用する用語であって、その概念に普遍性を持たせようとは思わない。

日本列島に生まれ住んでいる私たちにとつての「アルファベット」は、欧米の言語を表記する文字であって、その数が二六個であるという理解を超えるのはなかなか難しいように思える。ロシア文字三三個、ギリシア文字二四個、そして一般のアルファベット二六個というのが、規定の数値と捉えてしまう。

ところがここに提示した「拡張アルファベット」という側面から見ると、それはあくまで私たちが見ている見方に過ぎないことに気付く。たとえばドイツ語はその表記にはアルファベットを使用している。が三つの母音、*a, o, u* には変音符号(ウムラウト)が付いて、*ä, ö, ü* とは別の音を指示する文字になるし、*ss* は一つの文字になって一つの子音を指示する。

ルイ・ブライユの点字表

1 :	1 Aa	2 Bb	3 Cc	4 Dd	5 Ee	6 Ff	7 Gg	8 Hh	9 Ii	10 Jj	Upper4	
2 :	11 Kk	12 Ll	13 Mm	14 Nn	15 Oo	16 Pp	17 Qq	18 Rr	19 Ss	20 Tt	+ ⠠	
3 :	21 Uu	22 Vv	23 Xx	24 Yy	25 Zz	26 ge	27 es	28 em	29 β	30 st	+ ⠠	
4 :	31 au	32 eu	33 ei	34 ch	35 sch	36 ein	37 er	38 ue	39 oe	40 Ww	+ ⠠	
5 :	41 ,	42 ;	43 :	44 un	45 or	46 an	47 eh	48 te	49 in	50 ar	Lower4	
6 :	51 aeu	52 ie	53 ich	54 ae	55 des	56 im						
7 :	57 ig	58 lich	59 lich	60 ck	61 ck	62 ach	63 ach					

同様にフランス語でも、母音を表す文字に幾種かのアクセント符号が付いて、別の音を指示するのである。英語を見ると、アクセント符号や変音符号はないが、発音にはその分注意が必要になる。“meat”の“mea”は、綴りが違っていないながら発音は同じである。“meat”、“great”、“real”にある母音の綴り“ea”は、それぞれに発音が異なっている。フランス語やドイツ語では、母音の発音をより正確に表記しようとした工夫がなされているように見えるが、英語ではむしろ綴りと発音の整合性よりも綴りの伝統に比重がかかっているように見える。アルファベットとはその意味で、私たちが受け止めているほどには、二六個という数は、決して強い枠組みではないのかもしれない。

* 本稿では、ドイツ語の点字表記をご紹介するのだが、ドイツ語の表記について、二つの約束事を決めておきたい。一つは、“u”のウ

ムラウトである。通常タイプライターでは e を後置して表すので、ここでもそれに倣う。従って“ae:aeu:oe:ue”という表記になる。またドイツ語では“sz”を一字で表すが、通常タイプライターでは“B”を代用して当てる。しかし本稿では本来の“B”との混同を避けるために、“ β ”を使用する。

① ドイツ語点字と拡張アルファベット

私が「拡張アルファベット」という考えを持つようになったのは、「ドイツ語点字」に触れてからである。ドイツ語には、先ず母音の変音“umlaut”（ウムラウト）と、重子音である“sz”がある。ウムラウトは通常“a.o.u”の上に符号を付けて表されるが、点字ではそれを一マスの点字符号で表す。

ae = ⠠⠠⠠ oe = ⠠⠠⠠ ue = ⠠⠠⠠

“sz”は、通常一字“ β ”で表されるが、点字でも一マスの点字符号が当てられる。

β = ⠠⠠⠠

これだけ揃えばドイツ語は、点字で表記できると思える。確かに英語点字の“full spelling”の表記法は、アルファベットをそのまま点字符号に置き換えて表されるので、先ずはこれでよいと考えるのが普通であろう。ところがドイツ語点字の“Vollschrift”

(総綴り字法)では、このアルファベットに加えて、三つの重子音と五つの重母音が、それぞれ一マスの点字符号で表される。それぞれが音素を表す符号であるので、点字の表記の中では、通常のアルファベットと同格に扱われる。またこのうちの重母音は、一音節に数えられる。

oh = ⠠⠠⠠ sch = ⠠⠠⠠ st = ⠠⠠⠠

au = ⠠⠠⠠ aeu = ⠠⠠⠠ ei = ⠠⠠⠠ eu = ⠠⠠⠠ ie = ⠠⠠⠠

o:ns (eins) zw: (zwei) dr: (drei)

v:ir (vier) f:anf (fuenf) se:s (sechs)

s:iben (sieben) a:tt (acht) n:n (neun)

zehn

D:it: (Deutsch) :err: (Oesterreich)

B:im (Baum) B:ime (Baume) Fr: (Frau)

Fr:li:n (Freulein) H:is (Haus)

M:er (Meister) :r:ben (schreiben)

:ule (Schule) Rh:n (Rhein) W:n (Wien)

ドイツ語点字の総綴り法で単語を記すと、以上のようになる。

② ドイツ語点字とドイツ語

私たちが親しんでいる外国語と言えば、英語である。中学以来ずっと英語を教科として学んできた。受

験科目としては最も中心的な科目であった。サブカルチャーでも、音楽はポップス、映画はハリウッド、至る所に英語は溢れていた。だが本当に親しみを感じているのだろうか？極めて心許ない。ヒアリングはできず、トリーキングもスピーキングもできない。さらにリーディングもライティングもできない。全てに渡って中途半端で未熟なままなのである。

しかしどうしてももう一つ外国語を勉強しなければならなくなつた。そこで腹を括ることにした。誠に簡単に腹を括つた。現在の英語力（これ以上伸ばそうとは思っていない）と同程度の力をつければいいのか、と決めたのである。

ドイツ語に触れて見て最初に感じたのは、意外にも日本語に近いのではというものである。そんなはずはない。欧州諸語の中でも最も古いゲルマン語の構造を保持している言語と言われるドイツ語である。日本語とは対極的な位置にある言語である。そのような言語を、どうして近しく感じたのであろうか？

今思えば二つの理由に思い当たる。一つは、如何にも英語に苦しまされて来たからであろう。英語はくびきであった。もう一つは、英語ではない、別の外国語に触れることで、私の中の英語の占める場所が、だんだん小さくなって行く感触によるのである。これは実に心地よいものであった。

しかしそればかりではない、ドイツ語はやはり、英

語より日本語に近く思えてならない。理由を考えて見る。その一つは「格」である。

ドイツ語の構造に「格」の占めるところは極めて大きい。定冠詞の格変化の暗誦が、ドイツ語の勉強の始まりだ。文章の構造は、格による序列によって、その構成要素である語と語の関係が位置づけられる。定冠詞の格変化を暗誦することで、語と語の序列・関係が把握できるのである。

勿論日本語には、格変化などというものはない。しかし格を表す品詞はある。それは「助詞」である。ドイツ語の文を日本語に置き換えるとき、「助詞」、つまり「てにをは」をうまく格に当てはめてみると、案外にうまく行くことが分かる。これは英語では味わえない感触である。

もう一つが、造語力である。

日本語の造語は、その多くが漢語の熟語である。幕末から明治にかけて、多くの文物が西洋から渡来した。今までには見たこともなければ聞いたこともない、有形・無形の事物がやって来た。これらを日本語にするのが、当時の知識人の大きな仕事であった。「自然」、これを「シゼン」と読めば「nature」、
「人間」を「ニンゲン」と読めば「human」の訳語となつた。また新たに作られた漢語の熟語もあつた。「社会、世界、市民、国民」などは、現在普通の言葉として通用している。

もう一つ漢語の造語力がある。役所や大企業に行く
と、沢山の漢字が並んだプレートに出くわす。役所の
発行する印刷物にも、やたらと漢字が列を作っている。
このような漢字の並びは、漢字表記の負の部分とし
て、かつて「もつとわかりやすい表記に改めよう」と
したことがあった。それを実行すると、あに、外国
語（主に英語）の発音をカタカナで表したものになっ
てしまった。

だがこの漢字の造語力を積極的に評価すれば、無限
の可能性を秘めているとも言える。実際に「微苦笑」
や「異文化」という熟語は、少し前の辞書にはない語
である。専門分野、たとえば医学の用語では、この能
力が大いに発揮されている。漢字一つ一つを単語と捉
えて、その持つ意味と表される概念を組み合わせて新
たな用語が作られる。これによってやや難解ではあっ
ても、よりの確な理解を得られる用語となるのであ
る。

このような用語は、漢字を単語と捉えることによ
って可能になるのだが、ドイツ語にも類似、あるいは同
様の造語法がある。英語の名詞句や形容詞句を作るの
と同じ方法ではあるが、前置詞は関与せず、分ち書
きもせず、単語が一連の列を作って、一つの熟語を
構成するのである。たとえばドイツ連邦共和国は“B-
undesrepublik Deutschland”であり、マールブルク
の訓盲学院は“Blindenstudienanstalt”である。

このような「格変化」と「造語力」というドイツ語
の特徴を如何に点字で表すかということが、ドイツ語
点字の眼目であったに違いない。

ドイツ語の格変化は、極めて単純で規則的である。
単語の語尾の変化としては、“e-em-en-eres”の五
つの変化である。この最後の“eres”の二つは、語
尾の変化であるとともに、重要な単語でもある。

“Vollschrift”（総綴り字法）ではこの語尾変化は
全てアルファベットで表記されるが“Kurzschrift”
（略字法）では、一マスの音節略字が用いられる。

単語の簡略体は、英語点字と同様に、滑らかな触読
には欠かせない体系である。英語では二つ以上の単語
が任意に融合することはほとんどないが、ドイツ語で
は頻繁に行われる。簡略体を用意するにも、そのよう
な造語に耐えうる体系であることが求められる。ここ
ではそれらがどのように用いられているか、例示して
おく。

Bundesrepublik Deutschland → B:::d:::trk D:::l:::d

Blindenstudienanstalt → Blc:::udic::::::tt

Blindenvollschrift → Blc:::q:::tt

Blindenkurzschrift → Blckz:::tt

“Leitfaden der Blindenvollschrift” und “Kurz-
schrift” 1973 Blindenstudienanstalt Marburg La-
hn)

点字から識字までの距離（七〇）

新常用漢字表（二）

山内 薫（墨田区立あずま図書館）

元々、新聞の文字使用に関しては日本新聞協会（新聞社だけではなく全国の通信、放送各社が一九四六年七月に創立した社団法人）の中に新聞用語懇談会が設置されており、常用漢字表が出来た昭和五六年に常用漢字以外の文字で常用漢字並みに使える表外字六字（亀・舷・痕・挫・哨・狙）、二〇〇一年には三九字（例えば磯・鶴・柿・腎など）を追加している。さらに日本新聞協会に加盟しているNHKには放送用語委員会というものがあり、新聞協会が定めた六字十三九字の他に「鵜・梨・拉」の三字を表外字と定めて使用している。今回の新常用漢字表の提案について、日本新聞協会は二〇〇九年三月二四日に「『新常用漢字表（仮称）』に関する試案」への意見」を提出している。その中で字種に関しては以下の六点を具体的に提案している。

「今回の追加候補字種一九一字については、あまり必要でないとされる字種が入っている一方、日常よく使われている字種が入っていないものもあります。そこで次のように、さらに追加したい字種と、追加から

外したい字種が考えられます。

A さらに追加したい字種

① 社会生活上使われることが多く、仮名書きより漢字書きの方が分かりやすい字は追加する。↓現在『新聞用語集』で使用し、読者・視聴者の理解を得ている「磯 釜獅 柿」の4字や、数社で使用している「絆炒」など。

② よく使われる漢字熟語を構成する字で、それほど難しくないとと思われるものは、交ぜ書きを避けるため追加する。↓「禄（貫禄。代用字「貫録」と比べて本来の字は難しくない）肛（肛門）疹（発疹）蘇（蘇生）挽（挽回）胚（胚芽。単独でも使う）」など。

B 追加から外したい字種

③ 漢字書きがやや難しく、仮名書きでも読みにくくない和語（または和語化した語）に当てる漢字は採用しなくてもよい。

↓「顎 膝 肘 頬（体の部位名はよく使われるから難しいものは仮名書きが望ましい。また、これらの字は音読みが採用されていないので熟語に使用できない）宛 挨拶」など。

④ 漢字熟語を構成する字であっても、書き換えが定着し、追加されたために使い分けに迷うおそれのあるものは採用しなくてもよい。↓「潰（「壊滅、決壊」などが定着）苛（「過酷」が定着）」など。

⑤ 使用頻度が少なく、読み方が難しいと思われる字は採用しなくてもよい。↓「詮、憚、聘」など。(これらの文字を使用する場合には読み仮名を付けるのが適切)

⑥ 現行常用漢字で現在『新聞用語集』で使えないことを決めている一一字のうち、「箇」などは教科書等の表記に合わせるため使用することを検討中であるが、次の四字は引き続き使用しないという立場である。↓「且、又、但、虞」いずれも仮名書きが一般的である。「公用文作成の要領」でも副詞・接続詞などのうち、次のようなものは仮名書きにすると規定し、例として「且つ↓かつ、又↓また、但し↓ただし」を挙げている。また「虞(おそれ)」は難読で、仮名書きの方が分かりやすいし、漢字書きの場合、辞書でも「恐れ」の表記を採用している。」

以上が日本新聞協会の字種に対する意見だが、同会は合わせて先の字体についても次のような意見を述べている。

「新常用漢字表においては、一点しんにゆうで統一されている現行常用漢字の中に「遜、邈」など二点しんにゆうの文字が混在することになります。食偏の「餌、餅」なども同様です。漢字を教える場合、「これは二点しんにゆうで掲げられているけれど、書くときは一点しんにゆうでよい」というのは分かりにくく、「それならなぜこの字は一点しんにゆうにしない

のか」という疑問が出るのは当然です。書くことが困難な漢字でも、情報機器によって打ち出せるといわれるものの、画面が小さいと画数の多い字は読みにくくなります。多くの携帯端末、テレビなどで、常用漢字体およびそれに準じた簡易慣用字体、一点しんにゆうなどが使われているのは、読みやすさに留意しているからです。携帯電話などは、今回追加候補とされた字種について、常用漢字体は打ち出せませんが、本表に掲げられた印刷標準字体は出せない機種が多いのが実情です。

「曾、麵、瘦」は簡易慣用字体を本表に掲げ、「僧」「麦」「捜」などの整合が図られました。一歩進めて三部首許容を適用した常用漢字体を本表に掲げたらどうでしょうか。(中略)「本表では常用漢字表内の整合性を保つため、追加字種についても簡易慣用字体、部首許容の字体を掲げたが、これは印刷標準字体に従って改定されたJIS(X0213)の字体の変更を求めるものではない。印刷標準字体としての字体の基準は変わらない」と付記すればよいのではないのでしょうか。(以下略)」

以上の日本新聞協会の見解がほぼ現在の中庸な意見ということになりそうだ。

この字体の問題に関しては白川静が『常用字解』の巻頭でも述べているように「当用漢字表」の告示の時

から引き続いて問題とされている。白川はその中で「器・臭・類・戻」の「犬」の字を要素とする漢字が「大」の字に更改されたために漢字の構成的な意味が失われ、「害・告・舎」についても「まったく理由のない変改によって、字形本来の意味を表現できなくなっている。」と述べている。一方で嗅覚の「嗅」は表外字でありJISでも「犬」が使われているなど、現行の漢字使用には未だに多くの矛盾点が存在する。こうした問題に関して今回の改訂ですつきりさせることは出来ないものだろうか。

二〇〇九年四月一六日にパブリックコメントは締め切られた。朝日新聞（二〇〇九年五月一八日朝刊）によれば、「新常用漢字表（仮称）」に関する試案に寄せられたパブリックコメントは約二二〇件だったという。その中で追加字種候補に関しては、東京都三鷹市が長崎県松浦市（旧鷹島町など）や北海道鷹栖町などと連携して「鷹」を要望した例から、「私の名前の漢字を入れてほしい」という私的なもので、さらに三〇二字の希望があったという。朝日新聞の記事「審議の拙速 危ぶむ声 新常用漢字表」の中で「日本新聞協会用語専門委員の金武伸弥さんが『審議を拙速とする意見は傾聴に値する。来年二月に何が何でも答申することよりも、追加字種の字体問題などで十分な審議を尽くしたい』と発言した。」と書かれているが、全く同感である。

一言

岡田健嗣



上方落語の笑福亭伯鶴さんが電車の事故に遭ってから、半年を過ごした。これまでも知名度の高い視覚障害者が、交通事故などの災厄に遭遇して、その都度メディアは注目して見せたものだが、このような事故は、止む気配はない。

点字毎日が手元に届いた。そこには伯鶴さんの、「ご機嫌さんです」が載っていた。文章からだけだが、大変お元気そうに見える。幸いである。

この中に、面白い文があるので、引用して見る。原文はカナの点字であるので、ひらがな表記、カナ点字に做った分かち書き、棒引き仮名遣いにする。

「びょーいんで いろいろ たいけんしましたわ。

さいきんの けいこーでしよーが 『わかもの ことば』と いう もんわ どー しよーも おまへんなあ。にゅーいんを して おそらく 10だい こーは かの みならいか 20だい ぜんはんと おもえる かんごしさんの ことばづかいを きいてると わけ わからんし ぎやくに わかつたら むかつきまん なあ。とにかく よーじごが おおいですわ。じぶんの ばいほど とうしうえの かんじゃさんが はを

みがく ときに せんめんの どーぐを もって いて
『さあ こんど おくちを きれいな きれいな
しましよーね。ゆすいだ おみずわ のまないで
ぺっぺ しましよーね』。いうなら 『しよくじの
あと うがいです。みずわ のまずに ちゃんと は
きだして ください』で ええや おまへんか。…」
伯鶴さん、気張ってまんなあ！

異文化

今年 は点字の創案者であるルイ・ブライユ生誕二〇〇年に当たる年である。一月四日が誕生日で、年初から各メディアでは、色々な企画があったようである。

残念ながら全てを知ることではできなかったが、点字毎日や一般紙の特集を読むことはできた。

本誌に転載させていただいた木村多恵子さんの、点字毎日の募集に応じた原稿（残念ながら不掲載となったが）も、木村さんの、触読文字である点字への思いを、規定の字数に収めたものである。

木村さんの稿をお読みいただいた皆様には、点字という文字が、視覚障害者にとってどんな位置にあるかをご理解いただけたものと思う。だが驚いたのは、今回のブライユ生誕二〇〇年を記念した各紙の特集には、私の知る限り、我が国の文化に関心を寄せる視覚

障害者の視点は、全くなかった。

何年か前に、私のお話しした漢点字の話をお聞き下さった女性からいただいたメールに、面白かったという好意的なお言葉とともに、「異文化である視覚障害者の方から、漢字のお話をお聞きすることに、戸惑いを感じました。」という感想が述べられていた。正直私は驚いた。まさか同じ日本人であって、同じ日本語を話しているはずの私が、先方からは「異文化」な人と受け止められていたのである。瞬間的に反応してしまった。私の未熟故である。以来この「異文化」という言葉が、心から離れなくなってしまった。

「異文化」という語が、いったい何を指しているのか、今一つ分かり難い。私の愛用している電子ブック版の「広辞苑」（第四版）には、この項目はなかった。第六版にはあるが、「生活様式や宗教などが自分の生活圏と異なる文化。」と、読んで字の如し以上の説明はなかった。（もっとも「文化」という語からして、使う人によって、いくらでも都合よく使われる語ではあるが。）

私がカチンときてしまったのは、私は生まれ落ちてから日本を離れたことのない、日本語しか話せない、私と同じような境遇の人たちとの付き合いが多いという、とても普通と異なった生活をしている積もりはな

かったにもかかわらず、「異文化の視覚障害者」と括られたからに他ならない。がもう一つショックがあった。そのカチンときてしまったことそのものである。視覚障害者である私は、一般の健常者の皆さんと同様に評価され扱われるということが、これまでの経験に照らせば、むしろ通常ではないのである。見かけからして違うし、行動も違う、できないことも多い、このような常態から「異なる」という答えが導かれたとしても、ちっとも変ではないではないか、そういう考え方を充分理解していた積もりが、何故かスーッと私のなかから抜け落ちてしまっていたことに、強くショックだったのである。

今回のブライユ生誕二〇〇年を記念した各紙の特集は、大方が点字の意義を讃えた論旨の文章を募集するか、ブライユの足跡を訪ねるといったものである。ここにあったのは、触読文字が視覚障害者に如何に大きな福音をもたらしたか、論者がその習得に如何に苦勞し、どう享受し、感謝しているかというものであった。それはそれでいい。だが私には食い足りなかった。

我が国ばかりでない、全ての民族、全ての国々は、その歴史とともに文化を育んで来た。その「文化」の基層には、例外なく「文学」がある。詩人の大岡信さ

んは、化学や技術は、歴史を経れば経るほど豊かになるが、二千年前、三千年前の人々の考えていること、悩んでいること、憂い、喜びは、案外現在と共通するのである。当時の人々の遺した詩や散文に現代の私たちが惹かれるのも、人の変わらないものを、そこに感じ取るからであろう、とおっしゃっておられる。「文化」の基層をなす「文学」とは、そのようなものなのであろう。

視覚障害者にとってそういう文字であるはずの点字を創案したレイ・ブライユを讃え、感謝しようというなら、当然文字で表現したものをどう享受したか、どのような表現を心がけているかなど、書くべき視点はいくらでも見つかるはずなのだ。が残念ながらそのような文章には、お目にかかれなかった。

現在人の成長を語るには、学校教育の過程を無視できない。その学校教育で、ものを考える力の養育として、国語教育が位置づけられている。国語教育とは、読むことと書くことの教育である。初等教育では読み書きに欠かせない文字とその使用法を教え、読み方を教え、文を作らせる。(私はこの作文が、最も苦手であった。)

中等教育・高等教育の課程では、現代文の理解と鑑賞、古典の理解と鑑賞と歩を進める。このような過程

を「教育」と言う。これをドイツ語では“Bildung”と言う。人間の成長、人格の形成を指す語である。このような過程を通して、一人前の人間になると考えられている。我が国の文科省も、そのように考えているようである。

この六月十一日の毎日新聞に掲載された記事に、「かなしい」ときに、「悲しい」と書くか「哀しい」と書くか、あるいは「かなしい」とカナ書きするか、こういう選択は文字を知らなければできない、ということを書いて下さった。これは大上段に構えた物言いになる私に代わって、本会の会員のお一人が言って下さったものである。一般の日本人には、この選択は保障されている。うまくできるかどうかは、個人差の範疇である。

ところが視覚障害者の教育課程では、その基本となる文字、読み書きできる文字の教育がなされていない。そこで私は気がついた。視覚障害者を「異文化」な人たちと捉えている彼の女性は、決して視覚障害者に反感を持つていっているのではない。彼女の周辺の視覚障害者（彼女の周辺には、大勢の視覚障害者がいるようなのだ）たちが、「異文化」と理解しなくては理解できない人たちなのではなかるうか？

翻って私自身も、考えて見る必要があるようだ…。

毎日新聞記事から

漢字を表す「漢点字」を学ぶ人が

増えています

以下は、毎日新聞、六月十一日朝刊、家庭欄に掲載された記事です。有田浩子記者が、約半年に渡って取材して下さいました。

◇広がる言葉のイメージ

漢字の意味、成り立ちも表現

漢点字とは漢字を表現するための点字体系で、今から40年前に大阪府立盲学校教諭の故川上泰一氏が考案。盲学校のカリキュラムにはなく、点字を利用する人の間でも十分知られていないが、東京と横浜で市民団体が学習会を開き、少しずつそ野を広げている。

「最初に勉強するのは品川の『品』です。口が三つで構成されています。白川静先生の常用字解を見ると『品』はお祈りに関係する字だということがわかります」。横浜漢点字羽化の会の岡田健嗣（たけし）代表（59）は月1回、東京都港区の障害保健福祉センターで学習会を開き、参加者に1文字ずつ漢字の意味と形、漢点字の書き方を指導している。視覚障害があり

漢点字を学び始めて1年という竹井真紀子さん（28）は「漢字の形と意味が分かると、イメージが広がって面白い」と話す。

日本の点字の歴史は明治時代に始まる。東京盲啞（もうあ）学校教諭だった石川倉次氏が創始者ルイ・ブライユの点字を基に「日本語にあつたものが必要だ」と、現在普及している仮名点字を考案した。1マス縦3列、横2列の計6個の点を組み合わせ、仮名、数字、アルファベットなどを表す。この点字は単語の「音」だけを表すもので、漢字の成り立ちや意味は分からない。

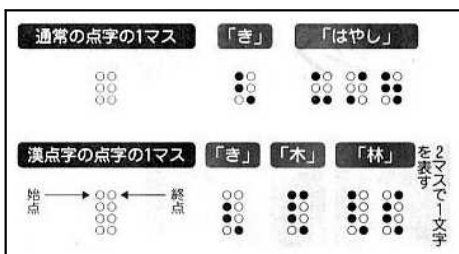
漢点字はこの6点の上に、漢字の始まりと終わりを表す二つの点を加え、縦4列横2列、計8個の点で構成している。入り組んだ漢字では全体の形を正確に表すことはできないが、「木」や「目」などの基本的な文字を1マスで表すルールを設け、それらを部首とした文字を最大3マスまでで表す。つまり、「品」ならば普通の点字では「し」と「な」だが、漢点字では「口」が三つ並んでいると表現する。漢点字を使えば、視覚障害があっても漢字とひらがなが交じった本来の日本語に近い形で文章を読むことができるという。

川上氏の漢点字は通信講座で広まった。そこで学んだ人々を中心に、17年前に横浜漢点字羽化の会が発

足。4年前には東京漢点字羽化の会ができた。会には視覚障害者だけでなくボランティアも加わっており、普通の文章を漢点字に変換するパソコンソフトを使い、テキストを作成する。東京羽化の会ではボランティアの中田利夫さん（60）が代表を務めている。

視覚障害者は約30万人。そのうち点字利用者は約3万人と言われる。盲学校では漢字そのものについても積極的には教えていないのが現状といい、漢点字を知っているのは全国でも1000人に満たないとされる。岡田代表は「例えば『かなしい』と書くときに『悲しい』と書くか『哀しい』と書くのか。目が見えなくてもそのときに最もふさわしい文字を使いたいし、その文字を思い浮かべながら話をしたい。それが我々が漢点字を学ぶ原点」と話す。

横浜の学習会は隔月の祝日（年内は7月20日、9月23日、11月23日）、横浜市中区の市健康福祉総合センターで。東京の学習会は毎月第3土曜日、東京都港区の障害保健福祉センターで。横浜の会では機関誌「うか」を発行しており、会で作成したテキストの販売もしている。問い合わせは岡田さん（0



3・3613・3160)。横浜の会はホームページ
(<http://ukanokai.web.infoseek.co.jp/>)もある。

◇固有名詞、同音異義語も正しく

漢点字には覚えなければならぬルールは多いが、言葉の世界が広がるメリットは大きい。例えば「き」という通常の点字の上に、漢字の始まり（左上）と終わり（右上）の二つの点を加えることで、漢字の「木」と読ませる。「き」を漢字で読む時の基本は最も多い「木」と決まっております、「気」は別の表記になる。これらを覚えることで「キニナルキ」を「気になる木」と理解することができる。

また、通常の点字にはないひらがなとカタカナの区別もあり、固有名詞や同音異義語も正しく伝えられる。

写真―新しく漢点字を習い始めた人（右）に読み方を教える東京羽化の会のメンバー―東京都港区



左は点字毎日が、ルイ・ブライユ生誕200年を記念した募集論文に、木村多恵子さんが応募した文です。残念ながら同誌の掲載には至りませんでした。お許しをいただいで本誌に掲載させていただきます。

ルイ・ブライユの偉業を生かすために

東京 木村多恵子

ルイ・ブライユが点字を考え出したのは、視覚障害を持つ自らが、いつでも何処でも表現できる文字が、どうしても欲しかったからである。文字なくして知識を得たり教養を高めたりできない。それまでのアルファベットを浮き出させた文字は、読めなかったのである。だがその点字は、彼の生前には社会に受け入れられなかった。彼の死後点字は、明治維新直後の日本に届き、日本語に合った点字が必要と、石川倉次氏が「日本語点字」を翻案した。しかし漢字を作るまでには至らなかった。

1969年、川上泰一氏が「漢点字」を発表して、日本の視覚障害者にも文字の曙が訪れた。2点増やして、漢字とかなとを分けて、触読に適したものにしました。今では視覚障害者もパソコンで漢字仮名交じり文を書いている。だが書くことができるようになれば、

語彙の貧しさに気づくはずだ。語彙を豊かにするには、常に「読む」ことを心がけなければならぬ。そこで漢点字の力が発揮される。

横浜で、『常用字解』（白川静編 平凡社2003年）の漢点字訳が完成し、既に横浜中央図書館に納められている。これらの漢点字書は、点字データとしてピンディスプレイで読めるソフトも用意されている。

「常用字解」は、白川漢字学の集大成の書である。

この見出し文字には、川上氏の提唱した字式が添えられている。これによって、視覚障害者にも漢字の形が分かる。わたしは、この本を読み始めた。漢字成立期の殷、周の古代の人々の生活習慣、神への畏敬の念や祭事の方法が、文字の成り立ちと深く関わっていることが記されている。

漢字教育は子供の時から受けるのがよい。触読文字である点字は、視覚障害者にとって必須であるから、漢字も触読文字で学ぶ必要がある。従って、漢点字を初等教育が取り上げるのが最も現実的であろう。このようにして、漢点字を学習した子供たちは、わたしたちとは別の人生を歩むはずだ。ブライユの仕事ベースに2点加えるだけで、漢字が生きてくる。彼が点字を考案したのは、文字を持つことによって豊かな人生を生きたいと願ったからではなかったか。

「東京漢点字羽化の会」例会報告と

わたくしごと

木村 多恵子



第41回例会 2009年4月8日（水）13:30～
15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

「漢文の読み方」を入力するために、レ点の付け方や送り仮名を入れる位置など、基本的なことを岡田さんが解説した。最初から、みんなと同じ所を入力していただいて、実際にそれを使って確認してゆくことにして、本の最初のコピーを持ち帰っていた。

4月24日の講演会のために、漢点字の説明のリハールをした。

ボランティア保険について確認した。

4月24日の善隣協会での、岡田さんの漢点字についての講演は、1時間という短い時間内で、必要なことを網羅して話され（もちろんご自身はもつと沢山伝えたいことが一杯あったと思うけれども）、後の30分の中に質問も出て、熱心に聞いてくださったことが良かったと感じた。わたしは、これまでに岡田さんが、漢点字と視覚障害者の識字に関して講演されたのを、何回か聴かせていただいたが、今回は滑らかで皆さんに

も岡田さんの思いが伝わったのではないかと思う。

質問された方の奥様が、点訳奉仕をしておられ、そのグループで、「漢点字」という言葉を聞いたことがないと言われたとお話にはやはり悲しかった。厳しい現実である。岡田さんがいつも言うように、漢点字を使って、しっかりと勉強し、実力を付けて、そのよさを伝えるしかないのだ。

けれども、「行頭下点」について具体的な質問が出たことでも、その熱心さが伝わってきた。

何れにしても、今回、村田先生をはじめ善隣協会の皆様には一つの機会を与えて頂けて、思わぬ方向から何かが起こされたら良いと思う。

岡田さんの講演内容は、善隣協会から発行されている「善隣」という雑誌に掲載されるという。善隣協会の皆様ありがとうございます。

この講演を、毎日新聞の有田記者も取材に来てくださった。この講演を聴かれて、なお熱心に、深く漢点字の有用性をご理解いただき、漢点字を、世に問い、広めるご協力をお願いしたいと思っている。

大阪から、この日のために「日本漢点字協会」会長の川上リツエ様がお出でくださったことを感謝いたします。

また、「横浜羽化」の木下さんや吉田さん、その他の皆様もご参加下さいましてありがとうございます。

「東京羽化」の皆様にも多数来ていただき、岡田さんのお手伝いもして下さいますありがとうございます。

第42回例会 2009年5月13日(水) 13:30

15:30、ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

今日は集中的に「漢文の読み方」の入力の方法について、具体的に入力していただいたものを使って、送り仮名や返り点の打ち方、記号の使い方など、部分的に、詳細にわたって、岡田さんの説明を受けた。時間が足りないほど皆さん熱中しておられた。

漢文を勉強すると、日本語の構造がよく分かるのだと、岡田さんは言う。正直に言えば、わたし個人は難しく何処までついてゆけるか心配である。ところが不思議なことに白文でも、これまでに聞き慣れた言葉は読めてしまう。たとえば、

「国破山河在」

は、「国破れて山河在り」と自然に読めてしまうから妙である。

「城春草木深」を「城春にして草木深し」

なんて読めてしまう。むしろ最初は訓点がない方が読めてしまいそうである。ところが同じ形式で、同じ数の漢字だけが並んでいても、これまで使い慣わされ、

聞き慣れていない詩句であったら、わたしには絶対に読めない。先人が訓点を付けることで日本語として理解できるように工夫してきた必然性はある。さて、これからの楽しみやつぱり難しいであろうが、それはわたしだけのことなので、階段を一段ずつ、ゆっくりでも上ってゆきたい。皆様よろしくお願いいたします。

4月24日の、善隣協会・岡田さんの講演会の折り、「日本漢字協会」会長の川上リツエ様から、大阪の美味しいお菓子とご寄付をいただき、賛助会費とさせていただきます。

5月23日の学習会には毎日新聞の有田記者が取材に見え、みなさんの学習風景を写真撮影された。

* 予告

6月の例会（第43回）、2009年6月10日（水）、13:30～15:30、7階第1会議室

第27回学習会、2009年6月20日（土）、18:30～20:30、港区ヒューマンプラザ7階第1会議室

7月の例会（第44回）、2009年7月8日（水）、7階第一会議室

第28回学習会、2009年7月11日（第二土曜日）、18:30～20:30、7階第一会議室

わたくしごと

「神様がくれた漢字たち」、なんと魅力的なタイトルだろう。だが用心してかからないと大変だ。何故って、この本は白川静先生が『常用字解』の序文で、「小、中学生向けに、漢字が作られた殷（3300年前）当時の、古代中国時代の生活習慣や宗教に深く関わる物語を著す」と約束した本がこれであろうから、ちよつと恐ろしい気がするのである。

漢字は、亀の甲羅や牛や羊、鹿の肩胛骨に刻まれたもので、それらの文字を「甲骨文字」といい、その文章化されたものを「甲骨文」と呼ぶようになったという。大半の漢字は亀の甲羅に記されたものであり、しかも、それは鋭い刃先のナイフのようなものでキリつと刻まれているという。

漢字が成立したのは、およそ3300年前の、中国の殷王朝が幾度か都を遷したのち、安陽に定着した武丁王の時期だという。

その安陽の時代に出土した亀の甲羅や動物の骨に、雨が降るか降らないか、風が吹くか吹かないか、穀物の実りがよいか、出産に危険はないか、異族を征伐できるかどうか、などいろいろながらについての占いの内容が、漢字で刻まれている。

この問いは、王が神に告げ、神に尋ね、神に訴える

ものである。それに対して神からの応答も記されている。神の応答は、亀の甲羅を灼いたときの裂け目に現れると信じられ、その裂け目を「兆候」といい、それを手掛かりに、王は判断する。なお興味深いことは、王の判断の言葉とともに、その判断が正しかったことを示す結果がつぶさに記されている。

王は、この漢字を用いて神に呼びかけ、神からの応えを読み解き、神の許しや助けを求めることが大きな仕事であった。もしそれらの要求が実現し、結果がよければ、王の判断は正しかったことになり、民衆から信頼され、神と等しい力を持ったかのように、その權威を増してゆく。つまり、漢字は王の特権を保証するために創造されたもののである。

古代の支配の仕組みは、基本的には、王自身が、神と人びととの媒介者として、重い使命を担うこととなる。

殷の王である湯が、夏王朝の桀（けつ）という王を討伐してから、ひどい旱魃が7年つづいた。洛川の水も涸れ果てた。殷の湯王がいった。「私が雨乞いをするのは、民のことを思うからである。もし、誰かが、祈らなければならぬとするならば、どうか、私をその任に当たらせて欲しい」。こうして、祓い清めて髪と爪を切つて、自

らを犠牲とし、桑林の中の祭壇で祈った。と『太平御覧』の中の『新王世記』という書に書かれているという。

このように古代の王は、本来民を守るための存在であったようだ。

これは「王と神の物語」に書いてあったのだが、読み進むに連れて、ちよつと薄気味悪い説明が沢山出てくる。

漢字が成立した殷・周の古代中国では、「人」を崇高なものとして扱つてはいない。この時代に出土した青銅器に鋳こまれた銘文や甲骨文には、殷から見ても「南人」と呼ばれる南方の異族や、「羌人（きょうじん）」と呼ばれる西方の異族の多くの人が、羊や牛とともに「捕獲」されて、生け贄として神にささげられた、という内容の記事が沢山見られるという。

「民」の字の由来は『万葉集』や『古事記』にもあるが、農耕に従事する人、罪を負う人、天皇の財宝とされる人などの意味で用いられたという。したがつて、下層民のことを「民草」ともいう。「民」は「田見」に語源を求めるようであるが、「民」の漢字の成り立ちに、むしろ「罪を負う人」のイメージがあるようである。もとは大きい矢か針で目を突き刺す形で記された。おそらく殷王朝を脅かす異族を捕らえて、その人

の目に加える処罰を示すもので、こうして眼睛（まなこ）を失った捕虜の多くは、神の僕として神に仕える身となるのだという。

「耳」にまつわる話は、これもまた凄惨になる。戦場で敵の首を打ち取ったとき、その左の耳を切り取って自分の陣へ持ち帰り、手柄の証明とする。左耳を手で取るさまを示す字が、「取」である。なぜ左の耳なのかはわからないが（勿論どちらか片方に決めておかなければ、正確に打ち倒した敵の数がわからないからであろう）、この顔から突き出しているところに靈的なものが宿ると感じていたのだろうという。この耳を祀った「耳塚」が何力所もあるという。

この打ち取った敵の死体から、さらに耳を切り取ることや、耳塚を作って、耳の靈すなわち死者の靈を鎮める習わしは日本にも伝わったので、我が国にも耳塚は何力所も残っているという。靈が籠もっている耳を祀らずに、安んじていられるものではないであろう。

このように耳には強い靈力があると信じられていたので、耳が入った文字は特別の意味があるものと考えられた。

たとえば、「聖」は大きく誇張された「耳」を持つ人の形で、神の預言を聴き分ける靈能のある人を行い、聖徳太子は、一度に幾人も人の意見を聴くこと

ができたと言う言い伝えはよく知られている。

「聖」、「聡」、「聴」の字は、いずれも、神の声に耳を澄ます態度を表すものと相通ずるところがあるという。

次にわたしが心惹かれた文字は「采」である。

「采」は、彩り、手で取り入れる、選び取るなどの意味がある。「采」は、上の方から手をかぶせるもの、木の実を「手」に採る形だという。

おおよそ紀元前八世紀から九世紀にかけて詠われた詩を収める「詩経」の中に、「卷耳（けんじ）」という詩がある。遠征に赴いていった人を思い懐かしむ詩である。

原文は省略する。ただし、一、二行目はここに挙げた文字なので記しておく。

卷を採り采るも傾けい筐きやうに盈みたず

みみなくさ
耳菜草を摘み摘むも

籠に満たない

ああ、あの人を思えば

遠く、あの人のもとへ通じる道のほとりに置く

岩山に登れば

わが馬はすでによたよた

いささか酒酌んで

思いを忘れよう

高山に登れば

わが馬はすでに黒ずんだ

いささか酒酌んで

憂いを忘れよう」

詩の初めの二句は、耳菜草をくりかえし摘んではいけるけれど、いっこうに籠をいっぱい満たすことができない、その嘆きを伝える。なぜこうまでして草摘を続けるのか、気がかりである。食用にするためであれば、せっかく摘んだ耳菜草を道のべに置くことはない。草を摘み、その草を道のべに置くこと自体に、重要な意味があったのだという。そして三句めでは、ほるかかなたの人を追想している。草を摘んで、道のほとりに置くことで、遠く隔てられた人に捧げ、その人の無事を祈ることであった。

『万葉集』の中に姫御子たちが、大津の御子を追想して、馬酔木の花を摘んでいる歌がある。山部赤人も、「春の野に葦摘みにと来し我そ野をなつかしきみ一夜寝にける」と詠んでいる。

草摘は、古代の人々の祭礼、俗習として広く行われていたようである。草を摘むことは、草を育てる大地にあるエネルギーをもらうことだったのである。

この本を読みながら、大樹に寄りかかっているときあの満足感が、古代の人のような鋭い感性ではないまでも、わずかなりともわたしにも残されていることがうれしかった。そして、子供の頃、為政者のために、寺院や宮殿など、大きな建築物の建立に当たって、その浄めとして、乙女を人柱としてさし出さなければならぬ、親子の悲しい話を読んだことを思い出した。あれは単なる「作り話」ではなかったのだ。犠牲にならざるをえない貧しい下層民の怒りが、悲しみが、傑出した物語として噴出し、多くの人たちの共感を得て、言い伝えられたのであろう。

ほとんどの人類は、最初、畏敬をもって神を創造している。神を信頼し、委ね、求め、訊ね、謙虚に神の言葉を厳粛に聴きしたがっている。しかし、いつの間にか人はその神に取って代わろうとしがちだ。漢字が作られ、王の権威が高まり、力を増すことによって、「神からの託宣」は、何時の間にか、王自身の都合のよい方向へ誘導していったのではなからうか？

これは本来のことから大変逸脱してしまったが、中国の人々の智慧は、言葉では言い表せないほどの驚きである。漢字が作られたのは、今から三千三百年ほど前だと知ったとき、わたしは思わず読んでいた本から手を離して立ち上がり、部屋中を歩き回った覚えがあ

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

平成20年度 第12回 (第24回) 報告

1 日時 平成21年3月21日 (土)

18時30分～20時33分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者 (省略)

4 教材 「漢点字講習用テキスト 初級編

第三回 (全十回) 一点字編、墨字編

レーズライター・絹、季、委、

好、姉、妹、男、細

5 学習会内容

(1) お知らせ

4月24日の国際善隣協会の漢点字講話参加希望者は

岡田さんに連絡する。

(2) 前回の復習

・合 (リとレ下がり) と、合をパーツとして含

む文字三つ。

「合」 合を含む場合漢点字2マスで表す場合

は、レ下がりを使う場合が多い。

「給」 糸偏とレ下がり。

「拾」 手偏とレ下がり。

る。

今回「常用字解」と「神様がくれた漢字たち」を手にして、ほんの少しだけ、文字の成り立ちについて理解しようとする、古代の人々の、自然に対する鋭い感性は、「人は畏れ」から物事を考えるのだと気づかされた。「耳」が顔から突出しているのは、神の霊が宿っているところだ、と信ずるのには意表を突かれた。戦場で敵を討ち取って耳を切り取ることも、「耳塚」のあることも聴いていたし、何故「耳」を取るのか、理屈としては分かったつもりでいたが、今回の古代の人々の、人や物に対する考え方を、今までよりは理解出来た気がする。

エジプト王の墓に彫られた「ヒエログリフ」やシュメール人の「シュメール文字」や、クレタ島に現れた「線刻文字」は、何れもおよそ三千年ほど前に作られた文字である。しかしもう疾うに日常的には使われなくなった。

漢字は中国の人々の知恵の集積である。

とは言えわたしは臆病ものなので、オドロオドロしい説明を読み続けるのが少し辛い。

「神さまがくれた漢字たち」を読めるようにしてくださった、「東京羽化の会」の皆様ありがとうございました。

2009年5月29日

「答」 竹冠とレ下がり。

・員 (貝；オ下がりと口；レ) とそれをパーツとして含む文字一つ。

「貝」 貝は「鼎(カナエ)」金属製または土製の容器で普通は3足、「口は丸い形を意味し、鼎の周りを丸く囲んだ形からきている。

「損」 手偏(テ；1・2・3・4・5の点)と口で表し、貝の部分は省略。

(3) 今回の学習内容 テキスト第三回、
複合文字(1)

5. 漢数字および第1基本文字を

部首とした文字(5)

・史 (口と人) と、史をパーツとして含む文字。

87 「史」 口(レ、1・2・4・5の点)と人(ナ、1・3の点)で表す。口はサイ。サイを棒の先につけ振り回して神に折る。字式は口\\人。音読みのシは漢・呉音。熟語に「史実」「史跡」「郷土史」

「女工哀史」「美術史」などがある。旧字は中・又

88 「使」 第2人偏(4・6の点)二つで表す。字式は人偏十吏(リ)。音読みのシは漢・呉音。訓読みの「し・む」「せし・む」はほとんど使われない。熟語に「使者」「使命」「使途」「特使」「劳使」などがある。

・舌 (口と千) と舌をパーツとして含む文字三つ。

89 「舌」 口(レ、1・2・4・5の点)と千

(セ、1・2・4・5・6の点)で表す。字式は千・口。音読みのゼツは呉音、漢音にセツがある。熟語に「筆舌」「饒舌(ジョウゼツ)」「舌禍(ゼツカ)」「猫舌」「舌の根」など。他に「百舌(モズ)」がある。

90 「活」 さんずい(ニ、1・2・3の点)と舌(千で口の部分は省略)で表す。字式は、さんずい十舌。旧字は「干」の部分が「干」。口はサイ。音読みのカツは漢音。熟語に「活字」「活躍」「活用」「活性」「活版」「死活」など。他の読みとして「独活(ウド)」がある。

91 「舍」 三角屋根(リ、1・2・5)と舌(口の部分は省略)で表す。字式は屋根/土/口。音読みのシヤは漢・呉音。訓読みに「すてゝる」がある。熟語に「駅舎」「鳩舎」「牛舎」「舍利」など。他の読みとして「田舎(いなか)」「舍人(とねり)」がある。

92 「話」 言偏(エ、1・2・4の点)と舌(口の部分は省略)で表す。字式は言偏十舌。音読みのワは唐音。漢音にカとカイ、呉音にエとワイがある。元の意味に、神からダメだしされ悪口雑言を吐くことという説がある。熟語に「話法」「世話」「対話」「通話」「電話」「童話」「秘話」「実話」「手話」「茶話会」「裏話(うらばなし)」「噂話(うわさばなし)」

し) “ 〃 閑話 (カンワ) “ 〃 四方山話 (よもやまばなし) “ 〃 などがあある。

平成21年度 第1回 (第25回) 報告

1 日時 平成21年4月18日(土) 18時30分〜20時35分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者 (省略)

4 使用教材

「漢点字講習用 テキスト 初級編

第三回 (全十回)」点字編、墨字編

レーズライター…絹…、季…、委…、好…

姉…、妹…、男…、細…

5 学習会内容

(1) お知らせ

① 『うか第73号 2009年4月』配布

② 竹井さん所属「こうばこの会」の春季公演

4月25日午後1時開場

場所は東京都障害者福祉会館2階教室

(港区芝5・18・2)

③ 4月24日「国際善隣協会」における岡田さんの漢点字に関する講話

(2) 前回の復習

・ 史… (口と人) と、史をパーツとして含む文字。

「史…」、「使…」

・ 舌… (口と舌) と舌をパーツとして含む文字三つ。

「舌…」 蛇の舌のように先が二つに分かれ、よく動くというのが元の意味。

「活…」 舌の部分は、針をサイ(口)に突き刺す様が元の意味。

「舍…」 旧字の「舍」から、三角屋根の下に舌の漢点字を当てた。

「話…」 人の悪口を言うことからきた文字。

(3) 今回の学習内容 テキスト第三回、複合文字 (1)

5. 漢数字および第1基本文字を

部首とした文字 (5)

・ 口… (レ、1・2・4・5の点) を含むが

漢点字符号に反映されない文字。

93 「絹…」 糸(イ、1・2の点) と月(1・5の点) で表し、口は省略。口は丸い口、月は虫で口から糸を出している意味がある。字式は糸十口/月。音読み

みのケンハ漢・呉音。熟語に「人絹」「絹漉し(きぬごし)」「絹目」「生絹(キギヌ)…生糸で織った絹布。スズシ…生糸の織物で練っていないもの、の二つ

がある。」「人名に「人見絹枝(ひとみきぬえ)。1928年のアムステルダム・オリンピックで800mの2位。日本初の女性メダリスト。1907〜31)」「

6. 漢数字および第1基本文字を

部首とした文字 (6)

94 「季…」 ノ木(ノ、2・3・4の点) と子

部首とした文字 (6)

部首とした文字 (6)

(コ、2・4・6の点)で表す。字式はノ木ノ子。ノ木が上にある場合は、穀物も穂を帽子につけ、収穫を祝う舞を踊るという意味がある。舞うのは村長の末の子どもでそこから「すえ」の読みが生まれた。音読みのキは漢・呉音。訓読みに「とき、とし、ひで」がある。熟語に「年季」「季刊」「乾季」「季月」などがある。

* 女 (フ、1・3・4・6の点) を
パーツとして含む文字四つ。

95 「委 (フ、1・3・4・6の点)」ノ木 (ノ、2・3・4の点) と女 (フ、1・3・4・6の点) で表す。字式はノ木ノ女。収穫を祝う舞を女性が踊るという意味から発している。音読みのイは漢・呉音。熟語に「委員」「委細」「委棄(イキ)」「委託」「委曲(イキヨク、ツバラ、ツブツブ… 詳しいさま)」「などがある。他に「漢委奴国(かんのわのなのくに)」がある。

96 「好 (フ、1・3・4・6の点)」子 (コ、2・4・6の点) と女 (フ、1・3・4・6の点) で表す。女と子で表すと漢点字では別の字「娛」となる。字式は女十子。音読みのコウは漢・呉音。訓読みの名前で「よし」。熟語に「好評」「好機」「好物」「好色」「好調」「お好み焼き」「好奇心」「好事(コウズ)」「など多数。

97 「姉 (フ、1・3・4の点)」女 (フ、1・3・4の点) と市

(シ、1・2・5・6の点) で表す。字式は女十市。音読みのシは漢・呉音。熟語に「従姉(ジユウシ、年上の女のいとこ)」「など。

98 「妹 (フ、1・3・4・6の点)」と未で表す。字式は女十未。熟語に「令妹(レイマイ…他人の妹の尊語)」「妹背(イモセ…愛し合う男女、妹と兄、姉と弟)」「吾妹(ワギモ…男性が女性を親しんで呼ぶ語)。人名に「小野妹子(オノノイモコ…聖徳太子が命じた遣隋使)」「前の姉と合わせ、「従姉妹(イトコ)」「十姉妹(ジユウシマツ)」「などがある。

* 田 (タ、1・3・5の点) を
パーツとして含む文字四つ。

99 「男 (フ、1・3・4の点)」田と力 (ヌ、1・3・4の点) で表す。字式は田ノ力。田畑で力を出して働く男を表す。音読みのダンは漢音、ナンは呉音。訓読みに「おのこ」名前に使う「お」がある。熟語に「男爵」「下男」「男雛(オビナ)」「色男(いろおとこ)」「男色(ダシヨク)」「東男(あずまおとこ)」「女尊男卑」「善男善女」「男郎花(おとこまえ)」「地名に「男鹿(お多年草)」「男前(おとこまえ)」「地名に「男鹿(おが)」「男体山(なんたいさん)」「など多数ある。

見果てぬ夢を（十六）

山本優子

十五 第一回卒業式



孝之進の働きが拡大し、一般の新聞でも紹介されることが増えるにつれて、点字や盲教育のことを心に留める人たちも徐々に多くなっていった。が、六光社と訓盲院の経済的困難は、ひどくなる一方だった。そんな孝之進たちの苦闘を見るに見かねた援助者たちの助けがあり、訓盲院は明治四十一年春、校舎を加納町（かのうちょう）一丁目の衛生院（病院）跡に移転した。敷地四百坪（千三百二十平方メートル）、建坪百二十坪（三百九十六平方メートル）もあった。

二階建て本館は事務室、教室、職員室、食堂に当てられ、別館の病室だった部屋十室（六畳敷一階二階に五部屋ずつ）は、小学部児童と苦学生の寄宿舎とされた。また、六光社はどうとう引き払って本館の一室に併設した。職員も六名となり院舎も整い、訓盲と出版、つまり学校教育と社会教育に貢献する学園の形が

整ったのであった。だが、孝之進は著しい体調不良のため、これ以上働き続けられないのを感じるようになった。母や増江にさえ、具合が悪いのを見せないよう、がんばり通してしまふ孝之進だったが、時々あまりの疲労に昼間崩れるように横になり、しばらく動けないことがあった。周りの誰もが、

「先生、お身体悪いんとちやいますか」

と、言うようになってしまった。

一九〇八年（明治四十一年）の秋。明け方突然孝之進は、咯血した。増江は、慌てふためいて、医師を呼びに走った。これで胸を病んでいることがはっきりした。医師は肋膜炎と言ったが、孝之進には、自分の病状がよく理解できた。増江や訓盲院の院生、職員たちから離れなくてはならないと、孝之進は断腸の思いで、決心した。医師の勧めを受け入れ、明石大蔵谷（あかしのおくらだに）の「長寿院（ちようじゅいん）」という療養所に移り療養することにした。そこで祈りつつ院務にあたり、「あけぼの」の編集も続ける日々が続いた。加藤儀平は院と院長の間の連絡係りを勤めた。

「あけぼの」の抜き刷りなどを届けると、孝之進の声は明るくなる。

「しつかりやってきているな。神の支えがあるように」

と、孝之進は、儀平を励ますのだった。療養中ではあつても、元気なうちは儀平を海岸に連れていき水泳を教えたりもした。

しかし、療養先の孝之進のところには米が無いとか、お金がなくて不自由しているといった話がどこからともなく院生たちにも伝わった。

院生たちが連れ立って見舞いに行くと、孝之進は笑顔で、語るのだった。

「夢を、幻を持って、がんばるんだぞ。きみたちは、盲人界の未来を創りつつあるのだからな」

一九〇九年（明治四十二年）春、第一回の卒業式が執り行われた。安藤周作（あんど う しゅうさく）、天野文蔵（あまの ぶんぞう）、加藤儀平の三人の卒業生を社会に送り出したのである。彼らの晴れの日に参加することのできない孝之進は、なげなしの金を使って電報を送った。

「御国建設のため、邁進されんことを念ず……」

卒業式の後、孝之進の健康状態はますます悪化していった。衰弱した姿を人に見られることを孝之進は嫌

がり、院生以外の見舞いは断つてくれと駄々をこねるように増江に言うことがあった。体調が比較的よい日は正座して増江と共に心を注ぎだして祈る時間を持っていたが、それも難しくなっていく、一日中床にしていることが多くなった。増江は毎日のように孝之進に手を置いて一心に病の癒しを祈った。そんな時の孝之進は心地よさそうに目をつぶり、うつらうつらしながら祈りに心をあわせていた。そして最後にかすかな声で「アーメン」と言うのだった。

夏前に、

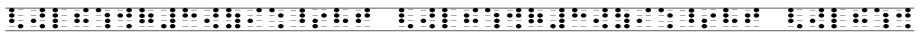
「半年ほど療養したら、訓盲院の方に顔を出したい。祈って欲しい」

という内容の手紙を増江に代筆させて訓盲院関係者に宛ててしたためた。それからは、院生たちの見舞いも断り、「あけぼの」の原稿を校正することもやめた。

同年十一月十一日、冬を思わせる寒さがやってきた朝だった。長寿院で増江と母千代に看取られながら、孝之進は眠るように召天した。三十九歳だった。

増江は、後に人に語った。

「あの人、夢を見ながら天国に旅立っていったみたいでした」



漢点字講習用テキスト

初級編 第十五回

3 複合文字 (1)

4. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (6)

- ※ 「口」を部首として含む文字 (続き)。
- ・「合」と、それを部首として含む文字三つ (続き)。

(84) 答 トウ こたえ こた - える

「竹」の下に「合」を置いた形の文字です。竹でできたフタが、容器にぴったりと合っていることを表していると言われます。そこから、相手の問いに対する「こたえ」の意味が生まれました。相手に対する返事、質問に対する答え、計算や問題の答えを意味します。漢点字では、「竹」(竹冠)と「合」で表されます。

「答案」「解答」「回答」「応答」「返答」「ご名答」

- ・「員」と、それを部首として含む文字一つ。

(85) 員 イン エン

「口」の下に「員」の置かれた形の文字です。元は、カナエの周りを丸く取り囲んだ形から始まったもので、「まるい」という意味が含まれています。現在では、人の数、ある枠内にいる人という意味で用いられます。また、一定の幅の意味も表します。漢点字では上下を逆にして、「員」(員)と「口」で表されます。

「員数」「人員」「会員」「社員」「店員」「定員」「団員」「乗員」「復員軍人」「幅員」

(86) 損 ソン そこ - なく そこ - ねる

「手偏」の右側に「員」を置いた形の文字です。「員」は、丸い形を意味して、丸い穴を表します。そこから、ものがなくなる、失われるの意味が生まれました。漢点字では、「手偏」と「員」で表されます。

「損失」「損害」「損益」「損金」「損傷」「破損」「欠損」「大損」



・「史𠄎𠄎」と、それを部首として含む文字一つ。

(87) 史𠄎𠄎 シ ふびと ふみ

横長の「口𠄎」に「人𠄎」に似た字の上の縦の線を重ねた形の文字です。ただし、「人𠄎」に似た字とは、右側の斜めの線が左側の斜めの線と、交差した形をしています。この横長の「口𠄎」は、竹の札を束ねて納める容器で、「人𠄎」の字に似た形は、それを持っている手を表しています。この文字は、「ふびと」と訓読みしますが、天子の側で、コヨミを作ったり、天文による占いをを行った官吏のことです。昔は、農業が製産の大部分を占めていましたので、自然の運行を見定めることが、政治の中心だったからです。時代が下って、「ふみ」と読むのは、歴史書のことを指します。中国では、一つの王朝の歴史書を編むことが、その国にとって、最も大きな事業でした。「ふびと」は、その編纂にも当たりました。漢点字では、「𠄎𠄎(口)」と「𠄎(人)」で表されます。「人𠄎」に似た形を、「人𠄎」で表しました。

「史記」「歴史」「世界史」「日本史」

(88) 使𠄎𠄎 シ つか-う つか-い し-む せし-む

「人𠄎偏」の右側に「史𠄎𠄎」の上の部分に横線を交差させた形の文字です。右側は、「史𠄎𠄎」と同様の意味の文字で、役人を表します。天子のツカイのことから、ものを使う、使いにやる、何かをさせる、という意味になりました。漢点字では、「𠄎(人偏)」と「𠄎(史に横線を交差させた形)」で表されます。「𠄎」は、第二人偏です。

* 「使𠄎𠄎」の旁は、「吏𠄎𠄎」で、「リ」と音読する文字です。意味は、「史𠄎𠄎」と同様、役人のことで、「官吏、吏員」と用いられます。詳細は中級編でご紹介します。

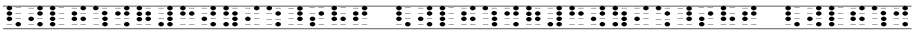
「使用」「使役」「大使」「遣唐使」「天使」「使い走り」「お使い物」

・「舌𠄎𠄎」と、それを部首として含む文字三つ。

(89) 舌𠄎𠄎 ゼツ した

漢数字の「千𠄎𠄎」の下に「口𠄎」を置いた形の文字です。この「千𠄎𠄎」は、数字ではありません。千の字の形をしていますが、本来は、「口の中で動くもの」という意味を表します。口の中で動くもの、そのシタから発せられる言葉、シタの形をしたもの等々の意味があります。漢点字では上下が逆になって、「𠄎(口)」と「𠄎(千)」で表されます。

「舌鋒」「弁舌」「毒舌」「長広舌」「滑舌」「竜舌蘭」「舌鼓」「舌舐り」「舌先三寸」「二枚舌」



(90) 活 カツ い - きる い - かす い - ける く -
らす

「さんずい

「活動」「活発」「活力」「活気」「活火山」「活魚」「生活」「自活」「快活」「復活」「活け花」「活け作り」

(91) 舎 シャ やど いえ やど - る やど - す

三角の屋根の形の下に「土

「舎監」「舎館」「寄宿舎」「官舎」「兵舎」「厩舎」

(92) 話 ワ はな - す はなし

「言

「話芸」「話題」「話術」「会話」「談話」「神話」「民話」「説話」「寓話」「逸話」「話し上手」「話し好き」「昔話」「夜話」

・「口

(93) 絹 ケン きぬ

左側に「糸

「絹糸」「絹布」「正絹」「人絹」「生絹」「練絹」「絹織物」

「報告と案内」

一 国際善隣協会で、漢点字のお話を

させていただきました。

去る四月二四日（金）、13・30～15・00、国際善隣
会館五階会議室で、漢点字のお話をさせていただきました。
した。

前号・前々号でご案内申上げましたように、横浜
国立大学の村田忠禧先生のご推薦で、社団法人・国際
善隣協会（〒105-0004東京都港区新橋一・五・五、TEL
03-3573-3051（代表）、URL: <http://www.kokusain.com/>）の、漢点字のお話をさせていただきました。
した。

「漢点字と日中友好」という演題でお話することに
なりましたが、私（岡田）は、中国の事情は全く存じ
上げないところから、村田先生に、大いに助けていた
だきました。先生のお話から、現在の中国の状況を知
ると、触読文字としての漢字の体系を、中国の視覚障
害者の皆さんにお見せできる時が、早く訪れることを
期待する気持ちになりました。

善隣協会の皆様は、漢字を触読文字である点字で表
すという試みについては、全く初めて触れられたご様
子でしたが、ご質問も沢山いただき、関心をお寄せい

いただきましたことに、心より感謝申し上げます。可能
であれば、文化交流の一つとして、中国の皆さんに漢
点字をご紹介できる機会をお与えいただければ幸甚に
存じます。

当日は、日本漢点字協会の川上リツエ会長も駆けつ
けて下さいまし
た。そして東京
と横浜の本会の
会員も、多数ご
来場下さいまし
た。またお手伝
いもいただきま
した。誠にあり
がとうございま
した。

当日の模様を
録音して、本誌
の前号・73号の
DAISY版ととも
に、DAISYの読
者の皆様にお届
け致しました。
善隣協会の皆
様、村田先生、



簡単な漢点字の形を説明しながら講演する岡田さん

誠にありがとうございます。漢点字の運動が、日中友好にお役に立てれば、この上ない慶びです。

二 毎日新聞様に取材していただきました。

昨年暮れから約半年間に渡って、毎日新聞様に、本会の活動を、取材していただきました。この六月十一日の朝刊「福祉ナビ」に、記事として掲載されました。直ちに本誌に転載させていただきました。ご一読下さい。

有田浩子さんに初めてお目にかかったのは、四年前・二〇〇五年の七月でした。東京でも羽化の会の活動を始めたいと考え、各紙に会員の募集記事の掲載をお願い致しましたところ、毎日新聞様だけが、直接取材して下さいました。他紙は、電話で用件をお伝えするに留まりました。

取材に訪れられたのが有田さんで、二時間を超える取材となりました。その結果、現在の東京の活動が成り立ったと言っても過言ではありません。

今回は「常用字解」漢点字版の完成によって、視覚障害者と漢字がより近しくなったこと、横浜でも東京でも、漢点字の学習会を開催していること、ボランティア会員の熱心な活動で、漢点字で読んで初めて鑑賞し得る書物の漢点字訳に取り組んでいることなどをお話し致しましたところ、じっくり日をかけて取材して

下さることになりました。

四月二四日の善隣協会でのお話にもお越し下さり、漢点字のパターンを直接ご覧いただけただけで、ご不明な点が明らかにできたとおっしゃって下さいました。

取材は東京が中心になりましたが、活動の内容は、横浜の活動も取り上げて下さいました。

有田さん、本当にありがとうございます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

三 音訳媒体の変更

本誌前号・73号の音訳版から、媒体をカセットテープから、DAISYに変更致しました。音訳者の皆さん、DAISY製作に携わって下さる皆さん、御礼を申し上げますとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。

四 漢点字講習会

漢点字の学習会も、横浜では七年目、東京では三年目に入りました。

毎日新聞の有田さんも、東京の会に二度ほどお越しになり、受講者の皆さんの熱心さに、心打たれた様子でした。

ご参加をご希望の方は、いつでも結構です、お声をおかけ下さい。

編集後記

▼入梅の季節となりました。地球温暖化の影響でしょうか、この梅雨の季節も、年々不規則な

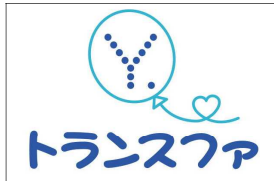
形でやってきます。どうやら今年は、沖繩がその標的になりつつあるようで、いつまでも強い梅雨前線が沖繩に張り付いて大雨を降らせています▼我々のボランティア仲間にも、体調をくずしたり、その他の事情で活動が続けられなくなったりという、困難な問題が出て始めています。ずっと「漢文のページ」で、漢文の例文を提供してきましたが、その担当者がどうしても継続することができない状態となつて、代わりの担当者が見つかるまで、しばらく「漢文」はお休みとさせていただきます▼先日の岡田代表による善隣協会での講演会では、与えられた短い時間の中で、「漢点字」をどう伝えていくかと、岡田さんは苦慮されていましたが、非常に手際よくまとめられ、漢点字についての話を聞く始めての人たちにも十分情報が伝えられていたものと思います▼ご多分に漏れず、横浜市も神奈川県も財政難で、小誌の発行に利用させていただいている神奈川県サポートセンターの印刷機も、無料部分が完全になくなって、すべて有料となりました。そのため、発行の費用もそれなりに増加しています。会の財政は、今すぐ危機的な状態になるというわけではありませんが、賛助会費等について、更に皆様のご協力をお願いしたいというのが、偽らぬ本音です。(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

「うか」第74号 《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は8月15日です。

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

E-MAIL(岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。